

ウェーバー像の《^{ほぐし・ぼらし}脱集計化》と^{じゃなかしゃば}変革への静かな呼びかけ
——《丁寧》かつ《しっかり》と「理解社会学」の
真骨頂を描ききる——

**Disaggregating Stereotypes of Weber's Sociology
and Calling for Revolution:
An Introductory Review Essay from a Personal Point of View**

川本 隆史
KAWAMOTO Takashi

国際基督教大学教養学部
International Christian University, Department of Humanities

キーワード

マックス・ウェーバー 理解社会学 脱集計化 脱実体化 知性主義

Keywords

Max Weber; Verstehende Soziologie; Disaggregation; De-substantialization; Intellectualism

Quadrante, No.24 (2022), pp.35–42.

目次

1. なが〜い前置き
2. ごくごく短い本論——執筆者の動機の「解明的理解」の試み?
3. 〈書かずもがな〉の注文・質問

個々の個人に内在する抽象物ではない。現実のあり方において、それは社会的な諸関係の総体(アンサンブル)である」(カール・マルクス「フォイエルバッハ・テーゼ」第6番)という真実の一端をお示しできればしめたもの、との目論見をもって進めます。

1. なが〜い前置き

The Long And Winding Road あるいは
The Way We Were (研究会活動を軸に
著者との交友の37年間を回顧する)

前座コメントの任を自ら買って出た川本隆史です。お配りしたレジュメにそって、ゆるゆると進めていきますので、肩の力を抜いてお聞きください。

まずは、著者との37年に及ぶ交友の軌跡を年譜風にたどるところから語り起こすといたしまししょう。どんなに頑張っても、森鷗外の傑作史伝『*渋江抽斎*』(新聞連載は1916年)の域に遠く及ばないこと請け合いですけど、私の記憶と記録を手がかりに、「人間の〔ここでは「著者と著書の」と読み替えます(引用者)〕本質は

【前史】

京都大学理学部を中退後、東京大学教養学部文科三類に入学し直した中野敏男さん(1950年生まれ)でしたが、卒業後に進学するつもりでいた大学院総合文化研究科(駒場)の志望コースの創設が遅れたため、やむなく(?) 1982年4月に本郷の大学院人文科学研究科修士課程(倫理学専攻)へと転進しました。幸か不幸か、この進路変更が私との遭遇をもたらすこととなります。まず修士課程2年目には、教養学部後期課程の卒業論文をベースとする初の著作『マックス・ウェーバーと現代:〈比較文化史的視座〉と〈物象化としての合理化〉』(三一書房、1983年8月)を堂々世に送っています。



同じ年、濱井修氏(東京大学)を研究代表者とする科研費プロジェクト「現代倫理学の再検討」(1983年度～1985年度)の研究会がスタートしました。3年続いたこの共同研究のある会合において、中野さんは第1作の副題に明示された問題意識の核心部を全面展開しています。1歳下なのに大学院の倫理学専攻では学年で七つも先輩の身となり、常勤ポストに就いていた私の耳にも、「駒場からすごい奴が入ってきている」との前評判が漏れ伝わっておりましたので、大物新人の報告を聴きに本郷まで足を運びました。おそらくこの日が著者との記念すべき初対面となったのでしょうけど、日時が特定できていません。

1984年4月1日、大庭健・星野勉の両先輩と私のトリオで「研究会」を立ち上げました。同年1月号より誌面および編集方針をリニューアルした月刊誌『理想』の「哲学展望：海外最新論文紹介」欄に、倫理学・社会哲学分野の注目論文の解説を隔月掲載するための勉強会として出発したものです。

【スタート】

1984年10月11日、雑誌『世界』創刊40年記念企画「〔年表解説〕戦後思潮40年」の準備会議が岩波書店会議室で開かれました。当時倫理学研究室の助手を務めていた星野さんの差配により、中野さんと私も「年表」作成チームに加わり、1年間の共同作業が始動します。その最終成果は、城塚登氏の名を冠する「年表解説」(同誌482号＝1985年12月号)を待つこととなりますけど、この初回ミーティングの帰途、板橋のお店で飲んで意気投合したのが、今にいたる「ワル仲間」(bad company)結成へとつながったのです。

同年10月20日・21日、日本倫理学会第35回大会(会場：筑波大学大学会館)への出張に中野さんを同伴しました。私の運転で往復した

帰りの車中、少し前に頂戴した1983年の単行本「あとがき」の冒頭と結びに対するさりげない問いを投げかけています。

10月28日、大庭さんたちとの研究会(当時の呼び名は「理想研」で、後に「現代倫理学研究会」を自称)第7回に中野さんが初お目見えしています。以後コア・メンバーとなった彼は、10回目(1985年1月15日)にはご自分のアパートの一室を会場として提供してくれました(このとき中野さんはハーバーマスの論考を紹介したとの記録が残っています)。

この「理想研」で中野さんにレビューを頼んだ最初の論文が、W. Brugger, “Max Weber and Human Rights as the Ethos of the Modern Era”, *Philosophy & Social Criticism*, vol. 9 (1982), pp.258-280です。紹介文は『理想』620号＝1985年1月号に載りました。

【断片的な記録——思い出し・聞き出したままに】

これより以下は、切れ切れの記録を時系列にそって並べていくだけの散漫な記述になります。

① 1980年代

懇意にしていた編集者・相川養三さんの発案・依頼に従い、2年半におよぶ「理想研」での学びと議論の蓄積を、四つのトピックごとの対論形式——方法論(大庭 vs. 熊野純彦)、正義論(川本 vs. 中野)、自由論(星野 vs. 佐藤康邦)、生命論(森岡正博 vs. 須藤自由児)——をまとって、月刊誌『創文』268号(1986年7月)から275号(1987年3月)まで連載しました。題して「論争の試み——倫理学」(4×2＝8回に政治学者・藤原保信氏の総評を加えて全9回)という続き物です。幸いにも私たちの取り組みは、『週刊読書人』の匿名コラム「プリズム」(1987年2月16日号／タイトルは「スリリングな倫理学を」)や『朝日新聞』文化面の記事(1987年4月11日夕刊／タイトルは「科学で解決困難

な生命の問題——9人の論者が可能性を語る」といった好意的な反響を招くにいたりしました。

ちなみに、私は連載3回目(同誌270号)の「正義観の対立と和解——現代正義論の課題と方法についての覚え書」を、論争相手の中野さんは次号の「正義をめぐる〈対話〉と〈会話〉——「正義観の対立と和解」を可能にするもの」を執筆しています。

② 1990年代

心ある仲間たちをつないで、出身校＝学閥を超え地域を横断する倫理学研究者の《ネットワーク》を創出しようとする協働の企てが、徐々に実を結んでいきます。その一つが、須藤訓任、水谷雅彦、鷲田清一の三氏と私とで編んだ『マイクロ・エシックス：小銭で払う倫理学』（叢書《エチカ》②、昭和堂、1993年9月）にほかなりません。日常身の些事・雑事（「委員会」に始まり「ワイドショー」で終わる48の事項）を倫理的に解き明かす、この型破りの入門書では、「カード」という項目を中野さんに書いてもらいました。当時、私の長男がはまっていた「ビックリマンシール」収集ブームを枕にふるといふ、しゃれた工夫が施されています。

中野さんの単行本第2作『近代法システムと批判——ウェーバーからルーマンを超えて』（弘文堂、1993年11月）については、刊行ほどない現代倫理学研究会例会（同年12月19日／会場：専修大学神田校舎）において合評会を挙りました（コメンテータは中岡成文氏と嶋津格氏）。法哲学者・井上達夫さんも熱弁をふるったらしい当日の議論の中身は、残念ながら私の「記憶」にほとんど残っていません。中岡氏による同書の書評「複雑度を増す社会の理論的選択を求めて——「法と権利の動的拮抗」を実現する方途を探る」（『週刊読書人』2018号、1994年1月28日）や関係者の証言が、その場の盛り上がりを取り戻す手がかりを与えて

くれるばかりです。

私の初めての単著『現代倫理学の冒険——社会理論のネットワークへ』（創文社、1995年1月）の第1部（現代正義論の構図）の「まとめに代えて」の末尾では、大庭さんの『権力はどんな力か——続・自己組織システムの倫理学』（勁草書房、1991年7月）と中野さんの第2作の両著を現代正義論の論争文脈に位置づけようとしてみました。ただし、そこでは「適合的複雑性」と規定されるシステム論的正義のもつ「意外な批判性」は、中野においてもまだ汲みつくされてはいない（96頁）との（無理解な？）評価で片付けているに過ぎません。ルーマン喰わず嫌い、からどうしても脱却できない私ゆえ、中野さんという「意外な批判性」を今もなお納得できておりません。おのれの不明をここで白状しておきます。

翌1996年の現代倫理学研究会の例会（3月17日／会場：専修大学神田校舎）では、中野さんの高村光太郎論（酒井直樹ほか編『ナショナルリティの脱構築』柏書房、1996年所収）を取り上げ、私が辛口批評をぶつけました。ワープロ作成のレジメ「中野敏男「暗愚な戦争」という記憶の意味——高村光太郎の場合」への評注」を手もとに保存しています。

次いで同年7月の現代倫理学研究会（7月31日／専修大学神田校舎）でも、中野さんは近作「支配の正当性——権力と支配を新たに概念構成する視野から」（岩波講座・現代社会学16『権力と支配の社会学』岩波書店、1996年6月所収）および「フーコー以後に権力批判はどうして可能なのか？」（未発表）に基づく先鋭的な問題提起をしてくれました。

同じく1996年の12月13日、中野さんと私の二人が博士学位請求論文の口述試験を受け（主査＝濱井修氏／東京大学文学部倫理学研究室）、そろって翌1997年2月19日付けの博士（文学）の学位記を授与されています。学位

取得では同期となったわけです。

1997年4月、私は初任校・跡見学園女子大学を辞して東北大学文学部へ転じました。新しい職場で組織した「KNS ネットワーク研究会」の第3回(同年10月27日/東北大学文学部棟の一室)では、中野さんと荻部直さんをゲストコメンテータに招き、同僚の野家啓一さんが著した『物語の哲学——柳田国男と歴史の発見』(岩波書店、1996年7月)の合評会を開催しています。懇親会后、評者お二人と鹿島徹さんとを私の宿舎へとお連れしました。そこで深夜のレクチャーを受けて、『プロ倫』の“Gewiss..., Aber...”に関する大塚久雄訳の誤りと正しい読み方を中野さんから直々に教わっています(今回の新書だと、121頁以下に詳しく述べられている解釈です)。

翌10月28日午後、私の担当科目「生命環境倫理学特論」の時間を拡大して、中野さんの基調報告「悪の存立と社会関係の可能性——悪は国家を必要とするのか」(同年10月19日、九州大学で開かれた日本倫理学会第48回大会の共通課題「悪」での発表に基づくもの)と、これに対する熊野純彦さんおよび荻部さんのコメントと質疑応答からなる討論会を実施しました。

1998年11月8日、私の編著『新・哲学講義 6〈共に生きる〉』(岩波書店、1998年)を現代倫理学研究会の例会(専修大学神田校舎)にて合評してもらいました。コメントを頼んだのは、山田忠彰さん、重田園江さんと中野さんの三人です。同書所収の金子郁容さんの「合理性と「弱さ」のジャンプ」の検討を引き受けた中野さんは、その場での金子さんらとのやり取りを通じて重要な着想(Einfall)にたどり着きません。これを練り上げた論考こそが、あの問題作「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」(『現代思想』1999年5月号/その後『大塚久雄と丸山真男——動員、主体、戦争責任』青土社、

2001年12月の第3章に収録)だったのです。

③2000年代

21世紀に入ります。『現代思想』2002年6月号に、中野さんは論鋒鋭いエッセイ「自己反省的主体の隘路——花崎皋平と徐京植との「論争」をめぐる」を公表しました。批判まじりの感想メールを書きかけたものの、送りそびれたまま今日を迎えています。花崎さんと徐さんとの「論争」をどう受けとめるかは、私にとって未決の難題の一つとなりました。

企画・編集に携わった『岩波 応用倫理学講義』(全7冊)の『4 経済』(岩波書店、2005年)巻末の「シンポジウム 四酔人経論問答 経済と倫理」に、中野さんが友情出演してくれました。他のシンポジアストは大沢真理さんと森まゆみさん、これに司会の私を加えた「四酔人」が「経済と倫理」をめぐる談論風発するという趣向を凝らしたのです。

難航をきわめたジョン・ロールズの主著の訳書(神島裕子さんと福間聡さんとの共訳)がようやく上梓されます——『正義論〔改訂版〕』(紀伊國屋書店、2010年11月)。校正の段階において、同書第82節の原注14で引証されるヴェーバーの英訳 *Economy and Society* の該当箇所(武藤一雄ほか訳『宗教社会学』創文社、1976年8月では57頁以下、287頁以下、139~152頁)およびロールズが用いる〈相互の比較が問題とならない諸集団〉(noncomparing groups)の含意に関する明快な解説を、中野さんから賜りました。実はこの件に限らず、教育・研究の場でヴェーバーを引き合いに出すに際して、中野さんの教示を受けるのを常としてきた私でした。

2010年10月24日、社会思想学会第35回大会(神奈川大学)に参加。同日のセッション「戦後思想史再考」(司会:初見基さん)における中野さんの「竹内好と「アジア主義」という

問題」および三島憲一さんの「和辻哲郎の象徴天皇論」の二つの報告に対して、フロアから質問しました。これを機に同学会の連続セッション《戦後思想再考》の常連メンバーに加わり、直近の2021年10月30日の10回目(オンライン開催)まで関与を続けております。

④2010年代～

中野さんが新境地を開いた意欲作『**詩歌と戦争：白秋と民衆、総力戦への「道」**』(NHK出版、2012年5月)が「第13回日本詩人クラブ詩界賞」を授与されます。2013年4月13日の贈呈式と祝賀パーティ(会場：東大駒場キャンパス)に参列した私は、パーティ席上での祝辞を仰せつかりました。後日、その返礼とともに著者より献本を受けたのが、『**マックス・ウェーバーと現代・増補版**』(青弓社、2013年4月)です。

次いで現代倫理学研究会6月例会(2013年6月1日/専修大学神田校舎)を『**詩歌と戦争**』の合評会にあてました。私は「自由主義・本質主義・植民地主義——中野敏男『**詩歌と戦争**』への unsympathetic なコメント」と題する論評を試みています(他のコメンテータは、村中知子さんと浅井幸子さんでした)。

2015年12月12日、戦後70年企画国際シンポジウム「東アジアで考える戦争民主主義と戦後日本」(会場：東京外国語大学)に赴き、中野さんのメインスピーチ「戦後70年に戦争民主主義を問う」を拝聴しています。

2016年3月15日、中野さんの東京外国語大学退職記念送別討論会《植民地主義が継続するとはどういうことか?》に(教授会をサボって!)駆けつけた私は、二次会までお付き合いして畏友の労をねぎらいました。

2019年7月13日、三宅弘さん、清水靖久さんと中野さんの三人が呼びかけ人に名を連ねた、折原浩著『**東大闘争総括——戦後責任・**

ヴェーバー研究・現場実践』(未来社、2019年1月)書評会(東洋大学白山キャンパス)を参観。第2部「学問」での中野さんの発言に襟を正さざるを得ませんでした。

2020年12月12日、宅急便で『**ヴェーバー入門——理解社会学の射程**』が届きます。「あとがき」、「はじめに」を卒読後、直ちにお礼のメールを送りました。著者と私のゆかりの場である「現代倫理学研究会」で合評会を開かねばとの意を固め、現・世話人の大川正彦さんとの共同謀議を始めています。2021年3月12日の例会を済ませた同月中旬より、コメンテータ候補者(前座の私を除くお二方)との交渉に取りかかりました。著者の人徳の賜物とみるべきでしょうけど、この下準備が思いのほかすんなり進み、3月23日配信の研究会メーリングリスト(件名 [genrinken 609])を通じて、本日のプログラムを予告するにいたった次第です。

2. ごくごく短い本論——執筆者の動機の「解明的理解」の試み?

脇役に徹するため、コメント本体は簡単に済ませます。

【1】何よりもまず感心したのは、難解な事柄を解きほぐそうとする「丁寧」かつ「しっかり」した論述の姿勢を——読者に語りかけるような文体に乗せて——貫き通しているところです。それを裏づける証拠として、本書で「丁寧」と「しっかり」が使われている箇所(数字は該当ページを表します)を列記しておきます。

- 「丁寧」：70頁(冒頭から～に読む)、77、91、114、123、143、157、164、176頁(～な検証／～に考察)、182、250頁(かなり～に紹介し考察してきました)、275頁(ていねい)

- 「しっかり」：44頁（～切り分け）、58、94、134、140、159、178、194、215、221、257、273頁（観点をしっかり据えて）

なお上記の二語との〈家族的類似性〉を有する言い回しとしては、「少し碎いて具体的に説明する」（57頁）、「注意が必要」（99、239頁）、「精細に確証」（170頁）、「少し注意して読めば」（218頁）、「精緻な道具立て」（265頁）、「徹底して読み直す」（274頁）があります。ちなみに、『ヴェーバー入門』の直前に出た中野さんの論文「理解社会学を語らずして、どうしてヴェーバーが語れるのか？」（『現代思想』2020年12月号 特集＝マックス・ウェーバー—没後一〇〇年）にも、この新書が「ヴェーバー理解社会学の生成をかなり丁寧に跡づけている」との自註が付されています（245頁上段〔傍点は引用者〕）。

【2】ドイツ語の語源や用法をしっかり押さえたうえで諄々と説かれる、訳語の提案や原語のニュアンスの釈義にも目を開かれました。たとえば das Sittliche を「社会倫理的なもの」、Antrieb を「駆動力」と訳し変え、stahlhartes Gehäuse の従前の訳語「鉄の檻」が「一面的な理解」を広げてきた難点を克服しようと、代わりに「鋼鉄のように固い殻」と素直に訳し通したところ、さらに Deutung（解明）がもとの動詞の私たちでは「民衆に分かるように説明する」という行為に根ざすものだったとの指摘などなど、枚挙にいとまがありません。

【3】「理解社会学」が提示する「時代と社会を考えるための特別な視点」（250頁）だと強調する、三つのポイントには心底うならされました。

①この学問は、社会の「近代化」のみならず「近代社会」という社会も実体化しては語らない（254頁）——社会の「脱実体化」（de-substantialization）とでも名づけられましょうか。

②「人間と社会の脱一体化的理解」（258頁）とその観点を通じて開かれる「それ〔＝現在の社会の組織形態〕とは異なる未来を構想して行動を開始するという可能性」（259頁）——人間と社会の「脱一体化」（disintegration）的理解のポテンシャルに注目せよとの示唆なのでしょう。

③倫理・宗教の源泉を一元的な要因に還元するマルクスやニーチェと異なり、「知性の推理力や構想力にもよりながら眼前の現世を超えて宗教的救済への志向が意識化・思想化され、そこに既存の慣習に縛られない世界像の革新も起こって、それが新たな倫理的要求を生み生活態度の刷新にもつながっている等々、知性が主導する一連の思想-実践連関の可能性がここでは見透されていると考えられるのです」（261頁）——「知性主義」の《実践的潜勢力》（このタームは花崎皋平さんの『力と理性』〔現代評論社、1972年〕の副題からあえて引きました）を活性化しようというわけですね。

心揺さぶられた「知性主義という視点」の最終段落を、読みあげさせてください——「西洋近代ということでもっとも「合理的」と見えたこの時代の社会の基調は、もっとも深い非合理（知性の分裂と反知性主義）によって支えられているということです。知性主義の視点をもってこのことが確認できるなら、そこから知性の分裂を超えるべく「近代的」と名指された時代状況

と社会事象への根本的な問い直しが始まります。そして、そのような根本的な問い直しの始まるころにこそ、新しい批判的な知性が主導する新しい生活態度と社会構想の可能性も開かれると希望することができるでしょう。この知性への覚醒、ここにわたしたちがヴェーバーから学ぶ思想の核心がひとつある、と私は考えます。」(263頁)

3.〈書かずもがな〉の注文・質問

「蛇足」以外の何物でもない要望を申し添えます。

【1】中野さんは「自らの学問的探求において、目をそらすことができず、また決して目をそらすまいと考えている〈出発点〉は、一九七〇年代前半の数年間にわたる政治活動の経験とその惨めな敗北である」と、つとに明言していました(中野1983「あとがき」／『増補版』では266頁)。この「経験」と「敗北」を——本書が careful に説き明かしてくれた「理解社会学」の真骨頂とその「特別な視点」とを活用して——ぜひとも究明してもらいたいのです。こう望むのは私ひとりではない、と断言してはばかりません。

そうした企ては、東大文学部の「学生処分」の不当性を明らかにすべく、「一〇月四日事件」(1967年)の行為連関を再構成しようとした折原浩さんや清水靖久さんの丹念なお仕事(折原『東大闘争総括』211頁以下／清水「東大紛争大詰めの文学部処分問題と白紙還元説」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第216集、2019年3月ほか)とも呼応しながら、厳しい自己切開を伴うものとなるに違いありません。けれどもこの中野さんの検証は、孤立無援の私的な営為に留まるものではないはずです。

【2】ナイーブな平和主義者が投げつける伊まったくのイチャモンですけど、副題の「射程」はもともと「軍事・兵器用語」であったものゆえ、できれば別のことばを使ってほしかったです。たとえば私のレジメに付けた副題だと「射程」を用いず、もっと古風に「真骨頂」(を描き切る)と形容してみました……。

【3】教養学部1年生の50年前に通読した日付(1971年1月14日)を記した『職業としての学問』(岩波文庫、尾高邦雄訳の旧版、1969年11月10日の第34刷)を、大学教員となって40年にわたり「倫理学」(および関連科目)の推薦図書に挙げて、学生たちと読み続けてきました。私の心にずっと引っかかっているのが、この講演の結びに登場する「デーモン」をどう訳しほぐしたらよいかという疑問です。「守護霊」、「守護神」といった従来の訳語はどれもしっくりきません。Dämon をゲーテの用語に遡及させる野崎敏郎さんがこれを「内なる力」と砕いた工夫と苦勞(『ヴェーバー『職業としての学問』の研究(完全版)』晃洋書房、2016年1月)には賛意を惜しまない私なのですが、「宗教倫理の実践的意味理解という、未完の問い」を引き継ごうとする中野さんならば「デーモン」をどんな日本語に置き換えてくれるのか、そのあたりを尋ねてみたくなります。

ある英訳書(*The Vocation Lectures: Science As a Vocation, Politics As a Vocation*, Hackett Publishing, 2004) が Dämon に attentive spirit をあてたひそみに倣うのも、まんざら捨てたものでもないでしょう。

「釈迦に説法」のそしりを免れないことを覚悟のうえで、野崎さんの上記訳書の引用をもって、拙いコメントの結びに代えさせていただきます。

「ここから、[いまこの場にいる]われわれは、憧憬し待ちこがれることのみをもっては事は成就しないという教訓を引きだし、別様になそうではありませんか。つまり[まずは]自分の仕事に取りかかり、——職務においてのみならず人間としても[=生の現場における人格としても]同様に——「日々の要求」を満たそうではありませんか。[ここから始める以外に途はありませんから。]しかし、もしも[われわれ]各々が、自分の命の糸を操っている内なる力^{デーモン}をみつけ、それに従うならば、この教訓はまったく単純素朴なことなのです。[今宵はここまでとします]」

(野崎2016:292)

【収録にあたっての追記】

メイン・タイトルにある「脱集計化」と「変革」に、それぞれ「ほぐし・ばらし」、「じゃなかしゃば」というルビを振っています。前者については拙論「記憶のケア」を織り上げる——〈脱集計化〉を縦糸、〈脱中心化〉を横糸に」（東琢磨・仙波希望両氏と私の共編著『忘却の記憶 広島』月曜社、2018年所収）を、後者に関しては花崎皋平さんの『じゃなかしゃばの哲学——ジェンダー・エスニシティ・エコロジー』（インパクト出版会、2002年）を参照していただければ幸甚です。